
佐助OffDay

右往左往

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

佐助OffDay

【Zマーク】

Z5008Z

【作者名】

右往左往

【あらすじ】

佐助の休暇を勝手に想像して書いてみました。

(前書き)

初投稿です！！

未熟な作者が書いていますので、広い心であまり期待せずに読んで
ください。

「ああ～、全く嫌んなつぢやうよ、全く。ハア～：（～～、～）

」

木の上で溜め息をつき、影が絵になる俺様、猿飛佐助（* ^ m ^ *）

俺様を悩ましてくれちゃつてんのは、俺様の主の真田の旦那。

そして旦那は、今、休暇です。休暇ですッ（ - ～ - #）

俺様も、昨日武田の大将に休暇もらつたはずなのに、はずなのに、ツ、

木の上ッ（： - ～ - ）

まあ、旦那が何かしでかすよりマシかあ～。

奥州行く氣ですよ、旦那はッ（ - ～ - ）

そもそも始まりは、俺様が何ヵ月ぶりかの休暇で外に買い物に出たとき。

休暇のはずの旦那が愛用の槍を持つて、愛用の馬にまたがつて東北に向かうのを見ちゃつたから（○ - - - b

今は戦中の所はないはずだし、だから休暇なんだし、つまり、伊達の竜の旦那と手合わせ：つていうのが、ピーンと賢い俺様にはわかつちゃつたわけで、わかつちゃつたからには、放つておけないわけで、今にいたる（： - ）

俺様、今、私服なのに…。

ちなみに、額あてと化粧は無しで、薄緑の和服、帯は黒、羽織は黒緑の渋いかんじ。

俺様なかなか（ - + - ）

だから、正直、動きにくいんだよねえ（ ^ - ^ - ）
あつ、旦那、甘味屋に入つた。

いいなあ、俺様も、団子食べよつかなあ（ > ^ < - ）

旦那に金銭管理させないようにしよう。旦那の給料の使い道…、どうだけ甘味屋で使ってんだろう(^ー^;)

んだけ甘咲屋で使つてんだけ(へーへー;)あつ…、品書き一週目突入してゐる(。。;)

あー……、品書き一週目突入してゐる（ 〇 ）
しかしまあ、腹が減つては戦はできぬつて言うけどねえ……。

田那の隠れまざのなつてゐんだろ（：：）

さて、俺様どうしようかなあ。

しづらしく、田那は食べてゐるだらうし、奥州に先回りでもして右田の

田那に会へどこうかねえ。

モードに、行動ですか。

無音の口笛を吹き、黒い巨鳥をよぶ。

關州志
卷之三
地理志

おつ、
いたいた！

「——は、勝手知つたる竜の旦那の屋敷。

そして、俺様は右目の田那の部屋の天井に、

「あははあ～、バレてた？俺様、忍なんだけどねえ

「たりまえだ。いつたい何のよひだ、…………珍しい格好してんな」

「あははあ、今回お忍びなの、忍のお忍びなんちやつて」

.....

「嫌だなあ、旦那黙んじゃないでよ（^_^;）」

「それで、何のようだ」

…それで、何のようだ

「そうそう、旦那に頼みがあつてね。竜の旦那のことだ」「いつたいどういうことだ…」

いきなり右田の旦那の眉間に皺がよる。

「いやあね、うちの旦那がこっち向かってたからね～。多分、竜の旦那とまた手合わせしようとしたんじゃないかってね」

「はあ。それで、なんで、政宗様でなく俺の方に…」

「だつて、竜の旦那相手しそうじやない。こっちもさつちも戦前の大変なときに怪我したら面倒」ことが増えるでしょ（・・・・・）

「まあな、それで俺か」

「そーいうこと（*^__^*）ってことでお願いしていい」

「まあ、今回は政宗様に怪我されたら大変だしな。政宗様は俺が何とかしよう。だが…」

「アハハ…。聞かれたね（○。・。）」

「政宗様、出ていらしてください」

「H a n、さすがに気付かれたか」

声と共に普段着の竜の旦那が部屋に入ってくる。

「ひむとり、そういうことが本業だからねえ（^__^・。）」

「政宗様、お聞きになつていたなり、おわかりですね」

「H a n…当たり前じやないか小十郎」

「悪いねえ」

「気にすんな。戦前に腕試しができて丁度いいじゃねえか」

「政宗様…！」「竜の旦那あ！」

「ん、どうした？ 小十郎にM o n k e y…ぬわつ…」

一瞬で間合いを詰めた右田の旦那が説教モードに入る。

「政宗様、あなたという方は…途中から話を聞いていなかつたでしょう…」

「聞いてたぜつ…、真田幸村が来るんだる」

「そこから、一騎討ちのことを考えておられたんですね」

「ありや～、竜の旦那もやる気満々？」

「なつ、駄目なのか！」

「当たり前です、政宗様」

「そう言つこと、旦那が来たら追い返してね～（^――^・）」

「わかりましたね、政宗様」

「…OK、ひょっと外に出て来るな、小十郎」

「政宗様、まさかとは思いますが、真田幸村を探しに行く気ではありますんね」

「あつあたりまえだぜ、小十郎」

「そですか、でわ、外ではなくお部屋で書類を片付けてください」

「OK、OK。わーたよ。そいじゃなMonkey See yo

u

「悪いねえ（^――^・）さいなら」

竜の旦那が出ていく。なんか俺様面倒事が起きそうな気がする…。右田の旦那を見ると、眉間にしわがよつてゐる。

「そちらも、大変そうだねえ～（^――^・）」

「まつたくだ。まあ、政宗様は、俺が何とかしよう」

「悪いねえ（^――^・）同じも同じようなもんなんだねえ」

鎧を着込み、六本の刀を装備した影が辺りを気にしながら屋敷を出ようとしている。

ふうう…。

なんとか、小十郎に見つからずに屋敷を出られたぜ。
待つてろよ、真田幸村ア！…！

「来ないねえ、「ひの田那」

時刻はもう夕食どき、甘味処から奥州にいい加減ついてもいいはずである。

「来ると決まつた訳じゃないだろ。」ひがひがしたたら来ないでいくれた方が助かるしな」

「そうだねえ、そういえば、右田の田那あ、竜の田那の配が無いけどいいの？」

「ああ……ああ！？ いつからだ猿飛！」

「えつと、部屋を出ていつたくらいかな」

「きつと、真田幸村を探しにいつたんだね！」

「大変だねえ（ 〇 ）」

「お前も手伝え！ 本気になる前に止めねえと被害がでかくなる」

「やうだねえ、うちの田那にけがされたも困るし、行きますか」

現れねえ。」んだけ田立つよつに城下町を歩いてんのに現れねえ。もしや、森ん中をきてんじや、せつとやつだ。よし、森に向かうぜ

！ 今いくぜ、真田幸村ア！

ありやりやあ～、竜の田那も、真田の田那も見つかんないよ～、まつたく（ - 、 - ）
とは言え、まだ戦い出してはいないみたいだねえ。

戦い出してたら火柱とか落雷とかとか…で、すぐわかるだろ？
し（^—^：）

「…と…お…う…ん…ぜつ…しょお…」（^—^：）

「半端なく遠いのにわかつちやう熱する声は…」

「あちやあ～、真田の旦那だね、こりや、竜の旦那に聞こえてなきやいいけど…まあ、俺様が先に旦那を回収すりやいいか（^—^：）」

佐助が真田幸村の声をたよりに向かう先は…。

ピクッ！

野生の勘がなせる技なのか、好敵手と認めあつてているからなのか、
ただ単に幸村の声がでかいのかはわからないが…、政宗は幸村の存
在に気づいた。それは、森の奥深くにいる己とは、正反対の場所、
城下町だったが…。

Shit！もつと先まで行くべきだつたぜ…
すぐにに向かうぜY—a—h—a—…！

「筆頭…？筆頭なら森にとばしてやしたが…」

「そうか、見つけ次第俺に連絡するんだ」

「わかりやした」

政宗様は森か、なんとしても止めねえと。

来る、絶対来る！チイツ！バレたか！般若みてーなオーラ…小十郎、
相当怒つてやがんな。

ヒィイイン

馬の鳴き声と共に小十郎が政宗の前に現れる。

「政宗様！」

「…どうした、小十郎？ そんなに、慌てて「
やり過」^{ハシタ}せるか…。

「どうしたではないでしょ！ 勝手に屋敷を抜け出して！
「んなつ、小十郎、俺はいちいちお前に外に出るのを伝えなきゃな
んない歳じやないぜ」
いけるか…。

「それで」^{ハシタ}ますが、政宗様。あなたは、^{ハシタ}奥州の一国の主で
す。」^{ハシタ}自覚なさつてください」

いけ…

「それに！ その姿、真田幸村を探していたのですね
いけ…なかつた！ Out！

「OK、OK。屋敷に戻るぜ、小十郎」
だが、城下町に馬を向ける。

俺は、まだ、諦めた訳じやないぜ、真田幸村ア！！！

妙に素直な主の隠せていない気合いと策略を感じつつ、ため息と共に政宗について行く小十郎がありました。

「だ、ん、なつ（ーー+）」

「ぬをつ、佐助！お主こんなどこりで何をしておる」

「こは、奥州の城下町にある一軒の甘味処である。そして、口に小豆を付けつつ驚いているのが、佐助と政宗が探していた、真田幸村である。

「それは、こひちの台詞だよ、田那。俺様は、田那追つてきたの（
^ー^・）」

「何故、それがしを追つてきたのだ」

「何故つてえ、休みの日に戦装束きつちり身に付けて、双槍背負つて、愛馬にまたがつて、東北に向かつて走る主がいたら追いかけるのが普通でしょおが（#*、、*）」

「なむつ、もしや佐助、それがしが政宗殿と一騎討ちひとつしていふと思つておるのか」

「それ以外にないでしょおが（#*、、*）」

「全く、佐助は心配性であるな、だが佐助、早とちりは良くないで

「じやるよ

「じやあ、なんのために奥州に來てるの田那（？ー？）」

「ふつ…」

幸村が指す先には、…大盛り早食いの広告が。

「まさか（。 。 。）」

「やうど！」やる、佐助これが目的だ！やるよ」

「じやつ、なんで戦装束きつちり着こんで、双槍横に置いてあんの（・ー・・）」

「やはり魂を燃やすためには、この格好で槍を持たねば…、

鬪魂絶唱ツツ！」

咆哮と共に猛烈な勢いで田那の姿を隠しているあんみつを胃に收める様子を見て…、なんか俺様、気が遠くなつてきた…。

「…どうしたのだ、佐助！」

「なんでもないよ、田那…。おばちゃん、普通の団子一皿」

乾いた笑いと一緒に、ここは何が美味しいとか何ともとほけた幸せ

そうな旦那の横に座る。

空は、夕暮れ。

ああ～あ、休日、無駄にしちゃった……（～～、～）

しばらくして、竜と右目の中那が甘味処にやって来て、俺様同様脱力してた。『迷惑おかげしました（^__^;）』
んで、收まりきらない竜の中那が、うちの中那と大食い勝負して、負けた上に右目の中那に怒られて帰つてつた。
右目の中那も大変だねえ。

今、中那と甲斐に帰つてるんだけど、謎があるんだよねえ（・_・；）

中那、どんだけ、食つてんの（。 。 ; ; ）

確か、奥州に来る前も品書き一週してたし、俺様に会つまでも食べてたらしいし、俺様とあつてからも凄い勢いで食べてたし、その後も竜の中那がダウンするくらいそのあとで食べてたし……怖つ（ 。 。 ; ）

別腹の域を余裕で飛び越えてる…。

甘党とは、知つていたけど、中那の胃袋恐るべし！

今回は中那の新たな一面を発見した休日だった（^__^;）
まあ、それなりに平和で良かつたけどね（*^__^*）

真田幸村ア、大食いでも勝つ！！！

Next Challenge!!!!

えつ、旦那、まだ甘味処寄るの…？

政宗は、幸村に勝てる日はくるのだろうか…。

(後書き)

読んでくださってありがとうございました！！
誤字脱字おかしな表現等がありましたら教えてほしいです。
感想など書いてもらえるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5008z/>

佐助OffDay

2011年12月16日23時45分発行